

学校目標・経営方針	自ら学ぶ態度の育成 体力と気力の充実 全人的な人格の形成
本年度の重点目標	1 自ら学び自ら考える力を養う 2 確かな学力の定着と個性の伸長を図る 3 健康の増進を図り、豊かな人間性や社会性を培う
達成度	A ほぼ達成できた。(8割以上) B 概ね達成できた。(6割以上) C 不十分である。(4割以上) D 達成できなかった。(4割以下)

山梨県立韮崎高等学校校長 飯田 春彦

評価	4 良くできている。
	3 おおむねできている。
	2 あまりできていない。
	1 できていない。

令和2年度重点目標		自己評価		令和2年度末評価		
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	自己評価結果	達成度	成果と次年度への課題・改善策
1	○ 学校生活のあらゆる場面で、自ら考え、判断し、行動する態度を育成する。 【教務】	探究型の授業を実践する。教育課程による教育活動、部活動等で、生徒が自身の現状の把握し、自らを振り返り、課題を見つけてその解決に向けて学習・行動できるよう指導する。	・探究型授業の評価 ・生徒が各活動において、主体的な態度で活動出来ているかの自己評価を確認する	・新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休業期間中には、多くの教員が動画は配信やClassiの活用することで、オンライン授業を行い、学力保障に取り組んだ。生徒の評価は概ね良好だが保護者の評価には厳しいところもあった。学校再開後も制約のある中で、各教員が探究型授業の実践に向け、工夫しており、生徒保護者からも良好な評価を受けている。	B	・オンライン授業については、YouTubeを利用した動画配信およびMicrosoft Teamsを利用した双方向授業の実施に向けて、各分掌にまたがる検討チームを立ち上げて、その実践方法を模索したり、他校の視察で学んだことをもとに、校内教員研修によってそのノウハウを、全職員で共有し、早期の実施に結びつけた。ただ学校再開後には必要性が減少しており、入手したノウハウを繋げていくことが課題 ・探究型授業については、各教員が意識して取り組んでいることは評価できるが、より教員同士の繋がりの構築が必要と思われる。
	○ 言語活動、探究活動の実践を通じ、主体的に物事を探究する力を身に付けさせる。 【SSHサイエンス振興・企画研究】 【総務・教育振興】	「スカラー」または「総合的な探究の時間」に実施する探究活動「グループ課題研究」を通して探究のプロセスを経験し課題解決力の育成を目指す。 (言語活動・協働作業・コミュニケーション力・表現力を総合的に育成する) 【SSH・企画】 読書活動を推進し、読書を通してものの見方や考え方を広げ、情報を適切に判断し活用する力を育成する。 【総務・教育振興】	ポスタープレゼンテーションを実施することで「仮説の設定→仮説の検証→考察→結論」のプロセスが的確に表現できたか検証する。 【SSH・企画】 図書館の図書貸出数、図書館と連携した授業等の実施 【総務・教育振興】	・1,2年生は全生徒がグループ課題研究に取り組み、ポスタープレゼンテーションまたはパワーポイントによる口頭発表を行った。「探究のプロセス」を全生徒が経験することができた。 ・グループで探究活動を行ったことにより、協働して課題解決に取り組む経験も積むことができた。 ・SSHと「総探」の連携が深まった。 ・「朝の読書」の実施や「としよかん通信」の発行、「読書週間」でのイベント活動を通して図書館利用の啓発を行った。図書の貸し出し数は昨年度より大幅に増え、また授業での図書館の活用回数も増加した。	A	・コロナ禍において導入したオンラインの活用が有効だった。「禍を転じて福となす」ことができた。この活用法をさらに研究し、生徒がメタ認知と方略に結び付けることのできる探究活動を支援する。 引き続き図書館利用についての啓発に努める。また、各教科で図書館と連携連携した授業を推進する。
	○ 個に応じた指導を充実させ、個々の進路希望を実現させる。 【進路】	模擬試験、課外講座、面接・小論文指導等の進路行事を通して、生徒の進路実現に必要な力を育成する。	・各種進路行事への参加者数 ・模擬試験の結果分析および事前・事後指導	・臨時休業後は模擬試験および課外講座を計画通りに実施できた。特に3学年に対しては、夏期講習を土日祝も含めて実施し、特に地歴公民及び理科の講座を充実させ、大学入学共通テストに対応できる実力を養成できた。 ・面接・小論文指導では、学校推薦型選抜に加え総合型選抜(旧AO入試)の受験者にも全校体制で指導する枠組みを構築し、国公立大学の学校推薦型選抜と総合型選抜の合格者数が31名となり、ここ10年間で最多となる成果を上げた。	A	模擬試験の事前・事後指導においては、より一層Classi等のICTツールを有効活用し、生徒自身による主体的なPDCAサイクルを確立するための一助とする。文部科学省の方針で、学校推薦型選抜・総合型選抜の定員が拡大し、また一般選抜においても多面的・総合的な評価が取り入れられる中で、総合型選抜の受験者に対して全校体制で指導を行った。学校推薦型選抜と合わせて国公立大学の合格者の増加につながったため、次年度もすべての生徒の進路実現に向けて、全校体制で指導を充実させる。
2	○ 授業改善を推進し、学習習慣の定着を図り、主体的に学ぶ態度を育成する。 【各学年】	【1学年】 学習・生活記録を活用することで自らの状況を把握させるとともに、家庭学習の時間を保障する諸活動の在り方を工夫する。	【1学年】 スタディーサポートの学習状況リサーチ結果、家庭学習表	Classiの活用により家庭学習の状況を確認し、生徒との懇談に役立った。スタディーサポートの学習状況リサーチにより自身の学習への取り組みを確認することができた。しかし、Classiの活用については多くの教職員が生徒の実態把握に有効であると考えているのに対して、生徒、保護者がその有効性についてやや懐疑的であるといえる。特に、保護者は「見ましたボタン」を押してくれる方が少なく、学校からの情報を確認してくれているのか不明なことが多い。	A	Classiの活用については、生徒が自身の学習状況を振り返って改善につなげることができ、一定の効果・成果はあった。しかし、入力にあたっては担任の粘り強い声掛けが必要であり、生徒の自発的な取り組みとClassiの有用性を説いていく必要を感じる。また、アンケートの結果により、Classi活用の有用性を保護者に周知する必要を感じる。「見ましたボタン」を押すことの励行を呼び掛けるなど、保護者に関心を持ってもらえるよう呼びかけた。
		【2学年】 ①授業の目的やねらいを明確に伝え、課題量を調整して取り組ませる。また、Classiの学習記録を活用し生活習慣や学習状況を自主的に振り返らせ、質と量の充実を図る。 ②オンライン課題や総合的な探究の時間、SSHでの活動、および、各種講演会を通じて、興味や適性を把握し進路目標を定める機会に結び付くよう授業を設計する。	【2学年】 ・Classiによる家庭学習時間集計及び振り返りアンケート結果 ・オンライン課題活用の振り返り ・ポートフォリオによる行事活動評価 ・進路関連調査結果	・臨時休業中に始まり、週末や長期休業の課題量を調整し、教科毎または一覧にまとめて生徒に提示できた。生徒と担任はClassiの学習記録を通して、学習状況を振り返り、三者懇談の機会には定期試験や模試データとも結びつけながら学力向上の動機づけに繋げることができた。 ・オンラインによる大学/学部/学科説明会や、大学講義、総探やSSHでの研究発表や小論文講座ほか、数多くの活動にWeb参加する機会が得られた。また、活動の記録はポートフォリオにまとめ、進路選択に生かせる学習記録として蓄積できた。	A	・高校生活の折り返しとなる前期終了時まではClassiによる学習記録の入力状況を学年として定期的に確認する作業を行ってきた。そのため、学年で5%程度の生徒(1日当たり10人未満)が入力し忘れる状況にとどまり、コロナ休業明け以降、新担任との記録による情報交換は比較的スムーズに、かつ、有効に行えた。一方で、後期に入り、クラスごと、また、生徒の自主性に任せ学習時間管理をさせたところ、個人差が出た。積極的に学習に向かう生徒、電子ツールを有効に活用できていた生徒ほど家庭学習の振り返りが学習成果に行かせている状況が明確にうかがえた。来年度は更に多くの活用が叶うような動機づけを図りたい。 ・大学からの情報提供で、オンライン説明会や講座の参加募集が本年度急増した。現地に赴かなくても全国一律、同じ条件で情報収集できる場面が確実に増えたため、来年度は各分掌と連携し、将来の進路実現につながる情報提供を適時に、適切に提示し、主体的な参加を促す方法を工夫すべきである。
		【3学年】 ①単元の目標(身に付けさせたい資質・能力)と指導内容及び評価を明確にし、生徒と共有する。 ②生徒が自身の学びを振り返る機会を設ける。 ③①②の向上・改善に資するようなICTの利用を検討し、積極的に活用する。 ④自己の進路実現に必要な情報や課題を生徒自ら認識し学習に反映できるよう、日常のホームルームや個別面談を通して支援する。	【3学年】 ・スタディーサポート学習状況リサーチ結果、Classiによる家庭学習時間集計及び振り返りアンケート結果、各教科のICT活用状況	①コロナの影響による休業期間も長期に及んだ影響から、目標と指導及び評価の一体化による授業が十分展開できなかった。学校再開後も、例年よりも早い段階から、入試に向けた演習中心の授業にならざるを得なかった。 ②学習を含む活動履歴の提出が入試で求められる場合も増えることから、多くの生徒がその趣旨を理解し、自身の諸活動を振り返る機会を得た。 ③主に②のために、生徒と教員の双方がClassiを効果的に活用することができた。 ④各担任は、個別面談等を中心に、十分かつ適時に入試関係の情報を生徒に提供することができた。	B	①今年度はコロナの影響により、休業期間中は配信された動画による授業となった。授業改善の趣旨とは異なるが、授業動画の作成のノウハウの一端を知る良い機会を得た。 ②入試上の必要性から、結果として、生徒が自身の学習や諸活動を振り返る機会を従来以上に意識するようになったと思われる。 ③生徒は自己推薦書や活動履歴、担任は推薦書及び調査書を作成する上で、生徒がClassi上にまとめた電子データが非常に役立った。 ④担任は、個々の生徒の進路に関する主体的な意思決定や取り組みを促す指導を良好に行うことができた。

学校関係者評価	
実施日(令和3年2月18日)	
評価	意見・要望等
4	・先の見通しができない中で、先生方のオンライン授業についての取組みは立派だった。 ・コロナ禍で大変な一年だったがオンライン授業など工夫しながら取組まれていた。このような経験が更に生かせるように今後の活用も期待する。 ・臨機応変に対応していると感じた。 ・コロナ禍の中で、短期間で新システムの導入がよくできた。
4	・全生徒が課題研究に取組み、グループ学習を行ったのは良い経験であった。 ・高校生になると時間的に難しいので図書館を利用して読書を奨励するのは将来にとって有意義である。 ・探求活動は課題解決力をつけるのに役立っていると思う。 ・分かり易くまとめてありまとめてあり、良かった。表現力(声、表情など)が豊かになるともっと素晴らしい。 ・オンラインの有効活用が、今後さらに進化していくことを望む。
4	・進路実現に向けて細やかな指導が成果となり保護者にとっても有難い。 ・個々の生徒の目標に向け適切な指導がなされていると思う。 ・個別指導の成果が出ていると感じる。
4	・保護者は子供への評価が厳しいかもしれない。Classiの活用については先生方の粘り強い指導に期待する。 ・1年生は学習習慣の確立という点から先生や保護者に更に働きかけをしてほしい。 ・classiの活用については、さらに浸透させていただきたい。 ・スタートから休校で生徒が不安定な状況によく対応したと思う。
4	・2年生になると個々の差が大きくなるのは仕方がない。Classiの有用性を自己実現にしっかりと結び付けていただきたい。 ・生徒がClassiの活用により学習効果が実感できるような指導をしてほしい。 ・主体的に学習することは勿論だが、社会的人間力(考える力、自ら動く力など)も備わることが望ましい。 ・授業や個別指導の苦勞があったと思うが、その成果が今後出てくると感じる。
4	・オンライン授業では評価が難しいと感じる。 ・学校再開後の素早い取組みが生徒の進路実現に功を奏したことが見てとれる。 ・コロナの影響がある中で生徒の進路実現のための工夫努力がうかがえる。 ・今後も国際的視野を広げるために工夫を期待する。 ・刻々と条件が変わる中、健闘したと思う。 ・授業時間削減の中で、個別指導等の対応をしっかりと行い、進路実現に繋げることができた。

学校目標・経営方針	自ら学ぶ態度の育成 体力と気力の充実 全人的な人格の形成								
本年度の重点目標	<ol style="list-style-type: none"> 1 自ら学び自ら考える力を養う 2 確かな学力の定着と個性の伸長を図る 3 健康の増進を図り、豊かな人間性や社会性を培う 								
達成度	<table border="1"> <tr> <td>A</td> <td>ほぼ達成できた。(8割以上)</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>概ね達成できた。(6割以上)</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>不十分である。(4割以上)</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td>達成できなかった。(4割以下)</td> </tr> </table>	A	ほぼ達成できた。(8割以上)	B	概ね達成できた。(6割以上)	C	不十分である。(4割以上)	D	達成できなかった。(4割以下)
A	ほぼ達成できた。(8割以上)								
B	概ね達成できた。(6割以上)								
C	不十分である。(4割以上)								
D	達成できなかった。(4割以下)								

評価	4 良くできている。
	3 おおむねできている。
	2 あまりできていない。
	1 できていない。

令和2年度の重点目標		自己評価		令和2年度末評価		学校関係者評価		
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	自己評価結果	達成度	成果と次年度への課題・改善策	実施日(令和3年2月18日)	
評価	意見・要望等							
	○ SSH・NIE・国際交流等への取組を通してグローバルな視野を養い、地域や世界で活躍できる人材育成に努める。 【SSHサイエンス振興・企画研究】 【総務・教育振興】	・従来実施してきた小中連携・企業連携を通して「韮高から世界へ！スパサイエンス・ハブ・スクールの構築」を目指す。【SSH・企画】 ・海外研修(オーストラリア)やフェアフィールド市との交流等を通して、異文化理解を深める。【総務・教育振興】	・各種SSH行事の遂行、探究活動の事後アンケートを通して生徒のキャリア意識が育成されたか検証する。【SSH・企画】 ・交流活動への参加 ・研修参加者へのアンケート【総務・教育振興】	・SSHの各種行事の多くを中止した。 ・オンラインを活用して実施できた事業がある。 ・東北地域科学研修をオンラインで実施し、生徒のキャリア意識の向上が認められた。 ・SDG'sを意識した「総探」のテーマ設定により社会的課題の認知が深まった。 ・オーストラリアのコロナ高校生徒の本年度の受け入れは中止になったが、国際交流委員が中心となり、手紙やメールでの交流に取り組んだ。	A	・今後ともCovid19の影響は続くことを想定し、実施の可否の検討ではなく、実施する手立てをひねり出すという姿勢を引き続き継続し、生徒の学校生活の質の向上に向けた企画を立案する。 ・オンラインの活用など新しい実施方法を韮崎高校の強みとしてより一層充実させる。 ・オンラインを活用した探究の方法を生徒とアイデアを出し合いながら追究する。 新型コロナの影響で生徒派遣や留学生の受け入れが難しくなっているが、コロナ禍における新たな国際交流の在り方を検討し、生徒が主体的に国際的な視野を広げることのできる機会を提供していく。	4	・貴重な行事・体験が中止となる中で、オンラインを利用して実施した事業など、新しい試みに先生方の努力を感じる。 ・国際的視野を広げるために今後も工夫を期待する。 ・厳しい状況下で、可能な対応や工夫が見られた。
	○ 学習と部活動等との調和を図り、「文武両道」を推進する。 【各学年】	【1学年】 学習と部活動の両立を実践できるよう、家庭学習の習慣化を支援するとともに、学習・生活記録を記録することで自己管理能力を身に付けさせる。 【2学年】 ①HR・教科担当、部顧問との連携を図り、生活時間の配分に配慮する。 ②下級生を支援・指導し、上級生としてふさわしい言動や、責任感、役割意識が高められるよう促す。また、Q-Uを活用して個に応じた指導を図り、生徒・保護者が相談しやすい雰囲気作りに努める。 ③各種講座や模擬試験、登校学習会への参加を促し、学力の伸長を図る。 【3学年】 ①担任と各部顧問との情報交換を密に図り、担任が部活動への取り組みを、部顧問が学習面や進路実現に向けた取り組みを励ますような体制を築く。 ②①のために、担任及び学年職員は個別面談等の機会をこまめに設け、生徒個々の理解に努める。	【1学年】 週末課題等の提出状況、スタディーサポートの学習状況リサーチ結果、家庭学習表 【2学年】 ・スタディーサポートの学習状況リサーチ結果 ・QUアンケート結果 ・週末課題等の提出状況および試験等の結果	週末や長期休業中の課題への取り組みは多くの生徒が期限を守って提出している。長期休業前には各教科の課題を一覧表にまとめて生徒に提示することで、計画的に取り組めば期限内に終わることを理解させた。アンケートの結果により、生徒・保護者とも「文武両道」を推進する本校のスタンスに理解と協力をいただいている。	A	コロナの影響で各種大会やコンクールなどが中止となり、各部とも思うような活動できなかった反面、そのモチベーションを学習に向けて取り組んだ生徒が多かったように感じる。今後コロナが落ち着いてきたところで両立に苦しむ生徒が出てくるのが予想される。進級して部の中核へと活躍の場を広げていく中で、各部顧問と連携しながら、生徒たちが不安な状況に陥らないよう支援していきたい。	4	・入学後すぐに休業に入った1年生に部活への思いを学習に向ける力に切り替えさせたのは見事である。 ・スタートが遅れたが、よく頑張った。 ・学習時間の確保と部活動とのバランスを工夫して対応できたと思う。
				・教員間は学年会議や部顧問への声掛けをとおして、生徒には学年集会や通信を利用しながら、情報を提示及び交換しながら、月単位で生活指針を示すことができた。また、事前に行事や模擬試験の準備や心構えを学年黒板に掲示できたことで、余裕をもって期日までに取り組ませることができた。 ・学習状況リサーチの結果からは、2学年中盤にあたり、部活動との両立が難しくなってきた生徒が伺えた。担任は定期試験や模擬試験の成績から該当生徒を特定し、個別や保護者との三者懇談を通して積極的な声掛けによる学力のサポートを行うことができた。	A	・学習への取り組みが不十分な生徒には定期試験前の補講や小テストでの追試験の機会を通して、習熟の機会を与えた。その結果、繰り返し参加する生徒が固定することなく支援策が奏功したため、次年度も同様に続けていく。 ・昨年度のQ-Uの結果を新クラスごとに分類しなおし活用することで、生徒の特長が把握しやすくなった。いじめアンケートの調査や友人関係に悩む生徒対応の際にも帳票を確認することで、本人や保護者との対応に配慮すべき状況が確認できたことは、今後も生かしていけるメリットである。	4	・担任・教科担任・部顧問が連携し、個々に声掛けし、補講をしっかり受けさせ支援したことは素晴らしい。 ・どの学年も、コロナ禍で活動が制限された中でも文武両道を実践するために、各部活動の顧問の先生や各学年の先生の連携がとれていると思う。 ・充実期にもかかわらず、出鼻をくじかれたが、十分な指導が行われたと感じる。
3	○ 学校行事等を通して校訓「百折不撓」の精神を培い、困難や挫折に直面しても、最後まであきらめない心を育成する。 【生徒会】	・生徒自らの手で企画運営し、与えられた条件の中で、自分の職責を果たすことで、最大の成果を出すことに努める。 ・活動を通して仲間との交流を深め、相手を理解する心や、周囲の支えに感謝する心を育てる。	・自分の役割を把握し、係や分担ごとに目標が達成できたかを検証する。 ・構築した人間関係をもとに、次の行事や取り組みを発展させる。	①個々の生徒の状況について、担任及び学年職員同士、または、各部顧問との情報交換を密に行い、日常的な励ましや声かけ、個別面談の参考にすることができた。 ②担任を中心に学年職員は、個々の生徒の進路状況に応じた個別面談及び指導を頻繁に実施した。また、問題を抱えている生徒については、その状況を学年職員で共有し、対応にあたることができた。	A	①コロナの影響により、多くの専門部で公式大会等が中止になった状況を受け、個々の生徒の詳細な様子を各部顧問に尋ねながら、励ましや心のケアに努めることができた。 ②進路に関わる個別指導や相談については、学年を越えた全校体制による対応をとっていただいたことにより、特に新たな入試制度による総合型及び学校推薦型選抜においても良好な結果に繋がった。	4	・担任・部顧問が情報交換を密に、個別面談を頻繁に実施したことで、新しい入試制度下でも良い結果を得られたのは立派である。 ・最後の1年という精神的にもつらい状況の中でもしっかりと対応できたと感じる。 ・最終学年において、部活動の成果を発揮する場面は限られてしまっただが、よく文武に努めた。
				学校行事が中止になったり、大幅に内容や方法が変更されたりする中でも活躍が見られた。顧問の先生方も可能な内容を模索し、それに対して生徒も、不平や不満を言わず、限りある機会を大切にしながら取り組んだ。中でも、形式を制限して開催された文化部の活動においては、芸術文化祭を中心に実力を発揮したり、テレビ中継などの手段を通して、活動実績を上げた。一方、(山梨県内の)感染状況の停滞によって、生徒の、活動や内容に対する願望が増大しているのも事実である。広範囲の情報の集約と、積極的な発案が必要であった。	B	学校評価のデータより、部活動における顧問の指導の把握状況に、生徒・教員と保護者との間において、差が見られることから、学校内における活動や内容が、家庭に効果的に伝わっていかず、伝えていかなかったりする状況が考えられる。よって、保護者の学校活動に対する理解と協力を深めるためにも、学校における様子を保護者に適切に伝えていくことが求められる。現在、校内だけでなく「生徒会だより」を保護者にも見ていただけるようHPにあげたり、活動結果だけでなく日常の活動の様子や顧問(担任)の意見やメッセージなども、掲載していける工夫をしていきたい。また、感染対策にともなう活動自粛疲れによる、生徒の活動意欲を低下させないためにも、さらに、行事の検討や、内容の工夫を重ねて実施していきたい。	4	・各種行事が中止となる中でも、生徒たちはよく頑張った。良い成績を取めたのは先生方の指導のお陰である。 ・制限のない日常に戻るためにはまだ時間がかかると思う。個々の生徒の活動や努力が認められる工夫をお願いしたい。 ・学校諸行事の中止は、団体生活を送るうえでのデメリットとなったが、活力を次に生かしていただきたい。
	○ 自分や他者の多様な生き方、考え方、存在を認め合う柔軟な心を育み、いじめを許さない集団・環境づくりに努める。 【生徒指導】	①学校生活を通して、自己の役割や責任の重要性を伝え、豊かな人間性や社会性を培う。 ②教員と生徒間のコミュニケーションを充実させ信頼関係を確立し、いじめの未然防止、早期発見に努める。	・集団活動における目的意識や人間関係形成能力育成の取組 ・いじめ未然防止、早期対応の取組	評価点【生徒93.8 保護者91.3 職員97.8】 ・個々の役割を認識させ、自主的な活動を促す取り組みを行った。本年度は多くの学校行事が中止になったため、特にHRでの活動を重視した。 ・いじめアンケート(年3回)以外に、普段の生活状況からいじめの予防と早期発見に努めている。いじめに関わる情報が確認でき次第、係・学年・保健室が連携・協働し対応に当たった。	A	・生徒の個性を踏まえたうえで、集団の中で「何ができるようにするのか」を意識した取り組みが今後も必要である。そのためにも学年・教科等と連携していく。 ・全職員が学校教育目標を基準に、「統一した指導」で生徒を育てていく意識をもつことが重要である。また、普段から生徒・保護者・教職員間での情報共有のネットワークを構築し、問題が起きた場合は迅速に対応していく。 ・いじめや不登校では、初期対応が重要となる。まずは正確に状況を確認し、問題解決に向けて全校体制で対応する。また、必要に応じて外部の専門機関との連携も行う。	4	・職員間で情報を共有し、一人一人に合った対応をしている様子が窺える。 ・いじめ問題にはしっかりと取り組んでいると感じる。今後も個々が尊重される取組みに期待する。 ・多様な考え方がもって育まれるよう、機会を作っていたきたい。 ・先生方が一丸となり、しっかりと取り組んだ成果が発揮されている。
	○ 安全教育を徹底し、生徒の危機管理能力を高め、自他の生命を尊重できる態度の育成に努める。 【生徒指導】	①マナーアップ運動や交通講話などを活用して規範意識を高め、交通事故・違反を減少させる。 ②防災避難訓練を通して、自ら危機回避、安全確保ができる判断力を養う。	・欠席・欠課数、交通事故・違反数 ・防災避難訓練の充実	評価点【生徒97.9 保護者95.5 職員97.9】 ・交通関係の苦情は例年と比べて半減した。定期的に生徒と保護者に交通安全の啓蒙活動を実施した影響が考えられる。また自損事故が増加したため、安全講習や定期的な注意喚起により運転者の意識向上を図った。 ・避難訓練では身を守ることに加え、他者のために自主的に行動できることを意識させた。避難完了時間は例年との差はなかった。	A	・本年度は自転車・バイクの「自損事故」が増加した。原因は不注意によるものも多く、運転技術の向上、時間に余裕をもつなどを事故を避けるための意識を徹底することが重要である。今後も「事故違反ゼロ」を目標に指導を行っていく。 ・大震災から時間が経過し、全体的に「防災意識が低下」している。訓練時だけでなく、平常時や非常時でも「自主的な行動」を促せる取り組みを実施していく。特に防災訓練については、地域との連携を重視した現実的な計画立案を行い、安全教育を推進していく。	4	・全県一区で、通学範囲が広く、生徒も保護者も大変だと思う。特に朝はゆとりをもって登校するよう指導をお願いしたい。 ・危機管理能力を高める指導は今度も継続してお願いしたい。 ・日常的な細かい指導が生きていていると感じる。